

大人数でレベル差の大きいクラスでの日本語会話授業の試み
—韓国での日本語教育現場から—

The new conversational learning approach for large, varied classroom setting
- For Korean learners of Japanese -

渡辺浩子(韓国 清州大学校)

要旨

韓国の大学の日本語会話クラスは、大人数でレベル差が大きいのが一般的である。このようなクラスにおいて、全員が発話し、個々のレベルに合ったタスクをこなし、さらにすべての学習者が楽しめる授業を行いたいと考え、教材および教授法である「ガイドド・インタビュー (Guided Interview)」を開発した。本稿は、「ガイドド・インタビュー (Guided Interview)」を紹介し、実践結果を報告するものである。

Abstract :

It is common for Japanese conversation classes at universities in Korea to be large and varied in regard to student speaking level abilities, age, and gender. The method introduced for this study will be based on the classroom environment, variations in individual student learning needs and learning material. The method has been given the name " Guided Interview.

Every student in a multileveled classroom setting can learn, speak and work tasks according to individual levels of ability while enjoying the classes. An explanation of techniques for implementing the "Guided Interview" method and respective teaching materials will be introduced in this paper. The purpose of this paper is to introduce the "Guided Interview" method and to report the results of practice.

【キーワード】大人数, レベル差が大きい, 「ガイドド・インタビュー (Guided Interview)」, ペアワーク, 学習者の同質性

1 始めに

韓国の大学では、日本人日本語教師の場合「日本語会話」「日本人会話」といった科目を担当することが多く、大人数でレベル差が大きいのが一般的である。このようなクラスにおいて、全員が発話し、個々のレベルに合ったタスクをこなし、さらにすべての学習者が楽しめる授業をおこないたいと考え、教材及び教授法である「ガイドド・インタビュー (Guided Interview)」(※)を開発した。

「ガイドド・インタビュー」の教材は、質問を羅列したペアワークのためのワーク・シートのようなものだが、「対象となる学習者と近いタイプの人から内容のヒントを得ている」「あいつちの挿入」「トピックスの継続や話題の転換を意識した構成」「学習者にとって話しやすい項目を選択できる」「教師が教室を巡回し、個別に助言する」など、教材作成や教室活動においてさまざまな工夫が取り入れられている。

本稿は、「ガイドド・インタビュー」の教材及び教授法を紹介し、実践結果を報告するものである。

※ 筆者による命名

2 「ガイドド・インタビュー」の開発に至るまで（問題の所在）

2.1 大学の初・中級の授業で以前から感じていたこと

- ① 初・中級のクラスにおけるやる気のある学習者の1つのタイプとして、休み時間などに教師に個人的な質問をしてくる学習者が、時折見受けられる。ただ、質問内容はほぼ決まっていて「先生は、韓国の食べ物は好きですか」「先生のふるさとはどこですか。」「先生はおいくつですか。」「休みの日には何をしますか」といったもので、バリエーションがないため、会話が続かない。このタイプの学習者の発話のバリエーションを増やせば、会話能力を伸ばすことができるのではないだろうか。
- ② 大学の日本語会話の授業では、1クラスの学習者の人数が多く、授業時間内に全員に発話させるのは、困難である。学習者同士が話すように、うまく誘導できないだろうか。
- ③ 大学のクラスでは、学習者のレベル差が大きい。どのようなレベルの学習者でも授業に参加でき、かつ、個人のレベルに応じて会話能力を向上させる方法はないだろうか。周囲の学習者よりレベルが低いため、消極的になりがちな学習者から、積極性を引き出すことはできないだろうか。
- ④ 初・中級の会話授業は、応答練習のように文法中心で、比較的型にはまった発話を導くといった形態が多くなりがちだが、学習者は、もっと自由に自分の言葉で話したいのではないだろうか。
- ⑤ 教師がいつも質問する側で、学習者が答える側という関係に固定せず、教師が、答える側になってもいいのではないか。
- ⑥ 韓国の学習者は、「フリートーキング」という授業形態を好み、希望することが多い。「自由に話す」という語義に憧れる面もあるようだ。しかし、「フリートーキング」の定義がはっきりしない上、既存のフリートーキング教材も使いやすいとはいえない。

2.2 授業のスケジュール及び教師側、職場側の問題

授業の種類、時間数が多く、準備に十分な時間がとれない。代行やスケジュールの変更などで、突然、授業を担当するようなことがときどき起きる。学習者の出席率が日によって大きく異なる。→様々な形態やレベルのクラスで使い回しができる教材が、あると便利である。

3 先行実践・先行研究の概観

3.1 フリートーキング

「フリートーキング」とは、韓国の日本語教育現場において広く行われている、会話の授業の一形態である。授業に頻繁に取り入れられ、学習者からの要望が多いことから見ても、外国語能力を伸ばす方法として有効であるという認識は、教師も学習者も持っているものと思われる。

それにも関わらず、「フリートーキング」という名称は、韓国においてのみ使われているようであり、定義もはっきりしていない。

応用言語学事典(2003)には、「フリー・トーキング」という項目はなく、また、筆者の知る限りでは、日本の日本語教育において、「フリートーキング」という名称は、特に使

われていないようである。韓国で英語を教えているアメリカ人教師によると、「アメリカでは聞いたことのない名称だが、韓国では、アメリカ人英語教師もよく使っている名称だ」ということである。

一方で、典型的な「フリートーキング」といえるような教材も存在する。韓国で市販されている、「フリートーキング」の教科書は、あるテーマに沿った本文と質問項目で構成されているものがほとんどである。本稿では、このようなフリートーキング教材を用いるか、それに準じた形で行う授業形態を「フリートーキング」と呼ぶことにする。

3.1.1 「フリートーキング」の問題点

① 既存の「フリートーキング」の教材は、本文を読んで質問に答える形式であることが多い。本文の話題が前提になっている質問が中心であると、本文を十分に読みこなせない学習者は質問に答えられず、授業に参加できなくなってしまう。→本文と質問が直接リンクしていなければ、レベルの低い学習者でも、質問に答えることができるのではないか。レベルによっては、本文は、なくてもいいのではないか。また、質問を導入として、本文を読むというような授業がむしろ有効な場合もあるのではないか。

② 「フリートーキング」の教材には、学習者が（ときには教師さえも）答えられない質問が意外に多い。簡単そうに見えて、実は難しい質問というものもある。たとえば、いきなり「どう思いますか」と聞かれても、すぐには答えられない。→答えをすぐに自分の知識から検索できるような質問から入るなど、質問のタスクレベルと提出順を工夫するといいいのではないか。

③ 各質問に関連性がないため、質問ごとに意識を転換しなければならず、負担である。また、質問と質問の間に空白の時間ができがちである。→関連性のある質問をし、同じトピックが継続できるような教材があるといいいのではないか。

④ 学習者が答えられない質問が続くと、ダメージが大きく、授業の雰囲気沈みがちである。→質問の種類を増やし学習者が自分のレベルや興味に合わせて選択することを可能にすれば解決できるのではないか。

⑤ 学習者の性別、年齢、職業などによって、興味の対象が異なる→学習者に合わせて、その都度内容の一部を変えられる教材や授業形態があるといいいのではないか。

3.2 OPIの考え方に基づいた日本語教授法

山内（2005）では、OPIの考え方に基づいた日本語教授法を紹介している。大人数とレベルの差にも注目しており、「60人で会話授業を行うことも、決して不可能でない」「『究極の会話テキスト』とは、『さまざまな母語を持つ、初級意から上級までのあらゆるレベルの学習者が大人数在籍するクラスで使うことができ、さらに、そのクラスのすべての学習者が非常に魅力的であると感じ、会話能力が確実に向上するテキスト』」とし、「究極の会話テキスト」の試作版を紹介している。

ただ、その一方で、「入門期の学習者のロールプレーを考えるとというのは、実はかなりの難題です。」とも述べている。入門期の学習者から上級の学習者まで対応できる方法はないだろうか。

4 「ガイドド・インタビュー」の教材作成

※【教材例1】 【教材例2】 参照

「ガイドド・インタビュー」では、教材の作成に重点を置く。

- ①学習者の年齢、職業、性別、生活環境、興味の対象等に留意したテーマを選び、誰もが負担なく答えられるような質問を作る。
- ②実際に学習者と対話をしているつもりで作成する。対象となる学習者と同じタイプの学習者との会話を再現することもある。
- ③あらかじめ、応答表現、相づちを挿入しておく。
- ④Bの回答者の答えをある程度予測して、質問を作成する。
- ⑤会話の流れを意識し、話題が変わるときは、「ところで」等の接続詞を挿入する。
- ⑦簡単な質問からスタートし、意見や、説明を求めるような質問は、終わりのほうでするようにする。

質問を作成する際、次のような流れを意識する。

- ・過去の経験→現在のこと→将来の予定・予想
- ・(個人から一般へ) 自分のこと→友人のこと→有名人のこと→一般的なこと
- ・単純で明るい内容の話題→社会問題など深刻で複雑な背景のある話題

- ⑧前の質問の答えによって、後の質問が大きく左右されるような構成には、できるだけしない。
- ⑨一度に二つ以上の質問はしない。教科書によく見られる質問形式だが、アンケート用紙ならともかく、実際の発話ではほとんど使われないからである。【例】×日本に行ったことがありますか。あるなら、どこですか。
- ⑩学習者が、ごく自然に次の質問をすることが予測できる場合、「(「どうしてですか」のことが多い)敢えて、次の質問は入れない。学習者の自主性を引き出すためである。【例】贈り物はどこで買うことが多いですか。×どうしてですか。

【教材例1】

グルメ	
A :	_____さんは、よく外食をしますか。
B :	_____
A :	そうですか。だれと食べに行くことが多いですか。
B :	そうですね。やっぱり、_____
A :	なるほど。どこによく行きますか。
B :	_____
A :	じゃあ、どんなものを注文しますか。
B :	_____
A :	そうですか。食事代はだれが払いますか。
B :	_____
A :	そうですか。食事をしたあとどこかへ行きますか。
B :	_____
A :	ところで、いままで食べたものの中で、いちばん高かったものは何ですか。

B : _____
A : そうですか。味はどうでしたか。
B : _____
A : また食べたいと思いますか
B : _____
A : ああ、そうですか。ところで、どこか、おすすめの店はありませんか
B : そうですね。_____にある_____という_____のがおすすめです。特に_____がおいしいですよ。
A : そうですか。今度、ぜひ、行ってみます。

【教材例2】

ごみ	
A : _____さんのうちにゴミ箱は、いくつありますか。	B : _____
A : _____ですか。じゃあ、燃えるごみと燃えないごみに分けて捨てていますか。	B : _____
A : そうですか。_____さんのうちのごみばこには、どんなごみが多いですか。	B : _____
A : そうですか。賞味期限が過ぎた食べ物は捨てますか。	B : _____
A : ふうん。じゃあ、ごみは、だれが捨てていますか。	B : _____
A : そうですか。_____さんは、物をよく捨てるほうですか。それとも、なかなか捨てられないほうですか。	B : _____
A : なるほどね。必要なものをうっかり捨ててしまったことがありますか。	B : _____
A : そうですか。必要がないのに、なかなか捨てられないものはありますか。	B : _____
A : そうですか。ところで、ほかの人が捨てたものを利用したことがありますか。	B : _____
A : そうですか。ごみを再活用したものには、どんなものがありますか。	B : _____
A : そうですか。ところで、ごみの捨て方のマナーが悪い人はいますか。	B : _____
A : ああ、やっぱりいるんですね。そんなとき、どうしますか。	B : _____

B : _____

5 「ガイドド・インタビュー」の使い方

5.1 会話授業での採り入れ方

- ①(初級学習者が中心のクラスで)「ガイドド・インタビュー」を主教材とする。
- ②(中・上級学習者が中心のクラスで)ウォーミング・アップとして、授業の始めに関連したトピックスのものを使用する。
- ③文法、読解、聞き取りの授業のあと、フィードバックとしておこなう。
- ④作文を書く前、アイデア創出のためにおこなう。
- ⑤時間が余ったときや、授業スケジュールが変更になったときの急場しのぎとしておこなう。

5.2 授業の進め方

- ①教師が質問文を読み、学習者が教師に続いて読む。
- ②教師が質問の意味と意図を説明し、答え方の例を挙げる。
- ③教師がBの答える側になり、Aを学習者のうち一人が担当し、クラス全員の前で対話をする。
- ④学習者がペアを組んで対話を行う。ペアを作るときレベルの違いは考慮しない。
- ④その間、教師は教室内を巡回し、助言をしたり質問に答えたりする。
- ⑤学習者がペアで対話を発表する。

5.3 教材の使用におけるルールおよび合意事項

- ①必要に応じ、教師側の指示で質問の削除、変更、追加等を行う。
- ②学習者が、自由に質問を削除、変更、追加してもよい。
- ③学習者は、自分に合った答えやすい質問だけ答えればよい。
- ④場合によっては、学習者が嘘をついてもいいこととする。→会話を進めるため。プライバシー保護のため。

5.4 学習者に期待すること(タスク)

- ①初級の低いレベルの学習者：質問を理解し、教師が示した答え方の例の中から選択する形で、答える。
- ②初級～中級の学習者：対話を多くおこなうことで、発話への抵抗感をなくし、同時に語彙、表現を豊かにする。
- ③レベルの高い学習者：教材にある、質問だけにとどまらず、学習者が自ら話題を発展させる。

6 初・中級クラスでの「ガイドド・インタビュー」の実践例

6.1 大学の初級会話クラスの授業で主教材として

- ①週2時間の授業の際、1時間に1つ、計2つのトピックスで「ガイドド・インタビュ

一」を行う。

②試験は、教師と学習者の1対1の面接式で行う。教師は、10のトピックスの中から一つをランダムに選んで、質問する。学習者は質問を聞き取り答える。評価基準は、答えの適切さと発話量。

6.2 インタビュー・プロジェクト・ワーク

①(「ガイドド・インタビュー」を取り入れているクラスで)学習者が、「ガイドド・インタビュー」を参考に、自分が好きなテーマでインタビューシートを作成。質問を10項目作る。※【教材例3】参照

②3～5人のグループで韓国に在住する日本人に電話でアポイントを取った上で訪問し、インタビューを行う。

③結果を報告書として提出。報告書をまとめる際、アイデア創出のために「ガイドド・インタビュー」を採用。学習者同士の共通体験を描写させた。※【教材例4】参照

【教材例3】

【 (テーマ) 】
A : インタビューをする人 : _____
B : 答える人 : _____
聞きとりをする人 : _____
1 A : _____
() B : _____
2 A : _____
() B : _____
.
.
.
10A : _____
() B : _____

【教材例4】

【インタビューを終えて】
A : インタビュー、お疲れ様でした。_____さんのグループのメンバーは、だれとだれですか。
B : _____
A : インタビューした日本人は、何という人ですか。
B : _____
A : 男の人ですか。女の人ですか。

B : _____
A : そうですね。最初の電話は、だれがかけたんですか。
B : _____
A : 電話でうまく会話できましたか。
B : _____
A : それはよかったですね。それで、いつ、どこでインタビューしたんですか。
B : _____
A : そうですね。事前にどんな準備をしたんですか。
B : _____
A : 場所は、すぐわかりましたか。
B : _____
A : ああ、そうですね。_____さんの最初の印象はどうでしたか。
B : _____
A : そうですね。最初、どんな話をしましたか。
B : _____
A : そうですね。インタビューは、どんな順番でしたんですか。
B : _____
.
.
.

7 「ガイドド・インタビュー」の自己評価

7.1 「ガイドド・インタビュー」の成果

大人数、レベル差が大きいクラスでも、ほぼ全員が会話に参加でき、パートナーとの会話を楽しんでいた。特に、学習経験はあるものの非常にレベルの低い学習者や、学習意欲が低い学習者も会話に参加したのは、画期的であった。

質問と、答えという簡単なタスクであるが、興味が刺激され、発話量が多くなるため、達成感、満足感、自信が得られるようである。特に、日本人教師と対話した後、その傾向が強い。

学習者はこの形態の授業をとっても喜び、「たくさん話せて自信がついた」「会話能力の向上の役に立った」という意見がよく聞かれた。

レベル差が大きくても学習者の興味に合った教材で授業を行えば、レベルの違いを超えて会話ができることが判明した。

また、学習者が教師にインタビューすることで、教師に親近感を持つようになった。

様々なトピックスを扱うことから、学習者が教師と個人的に話すときの話題の種類が増えた。

7.2 「ガイドド・インタビュー」の限界

①レベルの高い学習者の場合、授業への参加はできるものの、この方法では、能力を伸ばすことが困難である。教師の特別な関与が必要と思われる。

- ②このようなインタビュー形式の対話は、日本人同士の日常会話で使われることが少ないため、実用性が低い。
- ③タスクとしては、簡単であるにもかかわらず、学習者がたくさん話せたように感じて、この方法に甘んじてしまい、次のステップに進みにくいことがある。例えば「ガイドド・インタビュー」をおこなったあと、ロールプレーをおこなうと、突然発話が減り、授業への参加意欲が落ちる学習者がいる。
- ④教材を作成する際、学習者の好むトピックスを選択し、回答者の答えをあらかじめ予測して作っているため、似たタイプの学習者が集まっているクラスでは、対話が進むが、タイプの違う学習者が混在するクラスでは、発話が少なくなりやすい。

8 終りに

大人数で、レベル差が大きいクラスにおいては、中間的なレベルに標準を合わせた内容で、教師が一方向的に話し、数人の学習者を指名し答えさせる、という授業形式を取らざるをえないことが多いが、「ガイドド・インタビュー」を取り入れると、全員に発話させ、低いレベルの学習者にも自信を持たせることができる。

「ガイドド・インタビュー」は、学習者のレベル差といった「異質性」ではなく、「韓国人で大学生である」といった「同質性」に注目し教材開発及び教室活動を行った。これは、海外における日本語教育の重要性が高まりつつあり、国や地域に合った教材及び教授法が模索される中、一種の地域性を生かした会話教授法として有効な方法であると考えられる。

筆者は現在までに約70のテーマでの「ガイドド・インタビュー」の教材を作成し、その全てを実際に教室で使用した。授業での学習者の反応や日常の会話から常に学習者の興味を探り、それを元に既存の教材を改訂したり、新しいテーマの教材を作成したりしている。同じテーマでも「大学生用」と「社会人用」などのように学習者の生活環境に合わせ、2～3種類作成したものもある。

本稿では、教授法に対する成果と限界といった評価は、自己評価という筆者の主観のみで行ったが、今後は、データに基づく客観的な検証をおこなっていきたい。また、他の教師が「ガイドド・インタビュー」を採用した場合の再現性も検証していくつもりである。

一方で、この「ガイドド・インタビュー」がさらに活用され発展し、外国語教育における新たな可能性を切り開いていくことを期待する。

参考文献

- 鎌田修・川口義一・鈴木睦 編著(1996)日本語教授法 ワークショップ 凡人社
- 小池生夫 主幹(2003)応用言語学事典 研究社
- 千秋英二・高野進・岡崎学(2001) —————
(日本語会話 楽しいフリートーカー—初中級者用— 時事日本語社)
- 千秋英二・高野進・岡崎学(2001) —————
(日本語会話 楽しいフリートーカー—上中級者用— 時事日本語社)
- 日本語教育学会 編(2005)新版日本語教育事典 大修館書店
- 山内博之 (2005) O P I の考え方に基づいた日本語教授法 ひつじ書房

WEB 版『日本語教育実践研究フォーラム報告』

吉田守和・長田裕敬(1996)

(初級から楽しむやさしいフリー・トーキング 時事日本語社)